

歯科衛生士口演

(第3会場)

第3会場

HO-01



10月17日(金) 第3会場 15:00~15:10

HO-01

広汎型慢性歯周炎患者に対し歯科衛生士が介入した
26年経過症例

佐藤 昌美

キーワード：広汎型慢性歯周炎，ブラークコントロール，行動変容

【はじめに】歯周治療にはブラークコントロールの維持が必要であり、口腔衛生指導や定期的管理が重要となる。しかし、生活環境の変化により患者の受診が途絶え対応に苦慮する場合がある。今回、SPT中断を繰り返す広汎型慢性歯周炎患者に歯科衛生士が介入した26年の経過を報告する。

【症例の概要】患者：37歳男性，初診日：1999年8月。主訴：歯茎が腫れて歯医者に通うがよくなる。診査・検査所見：全顎的に歯肉腫脹を認め、PCR55.8%。X線写真にて上下顎前歯部に歯根1/2程度の水平性歯槽骨吸収を認めた。

【診断】広汎型慢性歯周炎 ステージⅢ グレードC

【治療方針】1. 歯周基本治療 2. 再評価 3. 歯周外科治療 4. 再評価 5. 口腔機能回復治療 6. SPT

【治療経過】歯周基本治療，歯周外科治療，補綴治療後にSPTに移行した。1ヶ月間隔のリコールを実施するが，生活環境が変化し受診が不定期となり，2009年，2011年，2016年にブラークコントロールの低下と歯周炎再発が認められた。再来院の度に患者のナラティブを聴き取り，健康に対する根源的欲求に焦点を当てた口腔衛生指導を実践し，患者に行動変容が現れた。2021年に患者は悪性リンパ腫のため抗がん剤治療と外科手術を行うが，同年の再評価においてPPD4～5mm 0.8%，PCR4.5%と良好な結果を得た。2022年2月より全身の健康状態に留意して2ヶ月間隔のSPTを継続している。

【考察・まとめ】SPT中断を繰り返した本症例においては，積極的な歯科衛生士の介入が患者の歯科衛生行動を支援したと考えられ，今後も患者の健康の維持増進に寄与したい。